

◆ 巻頭言

「多文化共生」の落とし穴

熊倉 敬聡

私と仲間たちは、「オルタナティブ」な学びの場で「多文化共生的」なコミュニティづくりの拠点として、慶應義塾大学三田キャンパスのほど近くに、「三田の家」(2006年～)と「芝の家」(2009年～)を営んでいます。そこは、日ごと、文字通り多種多様な人たち(大学関係者、地域の人々、ほか)が出入りし、出会い、多種多様な出来事を生み出しています。

先日、そこで、自分にとってはいまだに不可解な、おそらくご当人にとってはあまり愉快でない出来事が起こりました。三田の家では、誰でも料理を自由にできるのですが、それを(私にとって初対面の)ある「人」にお願いしたのです。自ら料理が「マニアックな」ほど好きと言ったその「人」が作り出す品々は、ありきたりの食材にもかかわらず、おそらく三田の家が始まって以来の、センス溢れるものでした。私は、その「人」を、外見・服装・声などから無意識に判断して、「ボーイッシュ」ながら「女性」と思い込み、第三者に「彼女は、」という言い方をしてしまったのです。が、本人から「俺、『彼女』じゃないし…」と眩かれ、“しまった、失礼した”と思いつつも、でもどう見ても「ボーイッシュな女性」にしか見えず、「トランス セクシュアル(トランス ジェンダー?)」な人なのか、単に外見が限りなく「ボーイッシュな女性」っぽい男性なのか、本人に真偽を問いただすのももちろん失礼だし、謝りたくても即座に何に対して謝っていいのかもわからず、ただただ料理を絶賛するにとどめ、「彼(女)」もその絶賛にまんざらでもない様子なのでした。

「多文化共生」とは、口で言うのはたやすいですが、その「多」を形づくる個々人の“特異性”と真に「共」に生きるには、粗暴な二項対立の先入観に絡めとられることなく、さらに繊細な感性と心遣いが必要なのだ、と、まざまざと思い知らされた次第です。



PROFILE

熊倉 敬聡

(くまくら たかあき)

慶應義塾大学工学部教授。『ステファヌ・マラルメの〈経済学〉』にてパリ第7大学博士。帰国後、現代美術・ダンスの研究・評論・実践。教育現場の変革のため、NPO法人「芸術家と子どもたち」に協力。「三田の家」の立ち上げ・運営。NPO法人ミラック理事。新著『汎眼想 もう一つの生活、もう一つの文明へ』(慶應義塾大学出版会、2012.4)のほか、『美学特殊C』『脱芸術／脱資本主義論』『女?日本?美?』など。

写真撮影:ミヨーン